



**Data**

監督：ヤン・ヤーチェ (楊雅喆)

出演：カラ・ワイ (惠英紅) / ウー・クージー (吳可熙) / ヴィッキー・チェン (文淇) / 陳莎莉 / 柯佳嬿 / 大久保麻梨子 / 王月 / 温貞菱 / 傅子純

**👁️👁️ みどころ**

「血にまみれた観音サマ」とは何とも不気味なタイトルだが、本作はれっきとした社会派クライム・サスペンス！政官財の癒着と汚職構造と言えば松本清張の小説の独壇場だが、日本統治の色が今なお残る台湾では、何と本作“おばさん”がそのフィクサー役を！

三姉妹と言えば『宋家の三姉妹』（97年）が、「三世代の女たち」と言えば『ジャスミンの花開く（茉莉花開 / Jasmine Women）』（04年）が有名だが、本作は政界を揺るがすスキャンダルに、同じお屋敷に住む母、娘、孫娘の三世代の女たちが立ち向かうもの。そこに描かれた三世代の女たちの力関係とドロドロ感にしっかり注目したい。

第13回大阪アジア映画祭に関係者として参加できたことを改めて感謝！



**■大阪アジア映画祭で台湾最新の話作を鑑賞！■**

台湾の2017年の第54回金馬獎で最優秀作品賞、カラ・ワイが最優秀主演女優賞、ヴィッキー・チェンが最優秀助演女優賞を受賞したのが本作品。さらに、本作は2017年の第37回香港電影金像獎では『戦狼2 ウルフ・オブ・ウォー2』『芳華』という中国映画の大ヒット作と並んで、最佳亜州電影（アジア映画賞）の5本の一つとしてノミネートされているからすごい。

今年3月に開催された第13回大阪アジア映画祭では、私が制作協力をした藤元明緒監督の『僕の帰る場所 Passage of Life』（17年）が上映されたため、

私もゲストの一員としてそこに招待された。そんな事情もあって、同映画祭の「コンペ部門」に出品されていた本作を鑑賞することに。今年のアジアン映画祭でそんな名作を鑑賞できたことに感謝！

## ■台湾にも政官財を巡る黒い霧が！■

本作は、冷静沈着な当主・棠夫人（カラ・ワイ）、自自由奔放で反抗的な娘・棠寧（ウー・クーシー）、控え目で従順な孫娘・棠真（ヴィッキー・チェン）という三世代の女性が主人公。都市開発やゴルフ場開発等の許認可を巡る政官財の黒い霧と、それを取りもつフィクサー。そんな社会派クライム・サスペンスは日本では松本清張の独壇場だが、日本統治時代の名残をとどめる棠家の豪邸で、女性一家3人で古物商を営む“棠家”には「台湾政財界のフィクサー」というもう一つの顔があったらしい。棠夫人はかわいい顔（？）に似合わず、そのフィクサーだったわけだ。

本作の主人公は、あくまで棠夫人・棠寧・棠真の3人だが、政の婦人部隊（？）として“立法”院長婦人（陳莎莉）、林議員婦人（大久保麻梨子）、県長婦人（王月）らが登場し、棠夫人と親しく談笑するシーンが再三登場する。しかし、それぞれの女たちのハラの中には・・・？また、本作中盤以降は林県長一家惨殺事件の発生をきっかけに、リャオ班長（警察官）が登場すると共に、事態は政界を揺るがす大スキャンダルへと発展していくので、その展開に注目！

## ■政官財の仕事を、棠夫人は女の細腕一本で！■

政官財の利権と癒着そして、その中でうごめく人間模様。それを描いては松本清張の右に出る作家はいないが、その主役は男ばかりだったはずだ。初期の『点と線』（58年）や『ゼロの焦点』（61年）のように女が主人公になる小説はもちろんあったが、そこでは女は虐げられた立場の中でもがく存在として描かれていたし、『霧の旗』（65年）では少しエキセントリックで復讐鬼のようなヒロインが主役にされていた。しかし、政官財の黒い霧を巡るフィクサーは日本では男に限られていたはずだ。そんな役柄を台湾のヤン・ヤーチェ監督は女性の棠夫人としたことに本作の大きな特徴がある。

完璧なファッションを身にまとい、女性としての魅力を周りに見せつけながらも、決して男に媚びず、眠る間も惜しんで仕事に精を出す凄腕の女ロビイスト“ミス・スローン”役をジェシカ・チャスティンが演じた『女神の見えざる手』（16年）は、ミス・スローンのもすごい知力と腕力に圧倒され、「女ながら、あっぱれ！」と感心させられた。それと同じように、本作で政官財の仕事を一手に引き受けている棠夫人の女の細腕の腕力もすごい。裏でそんなデッカイ稼ぎをしているため、娘の棠寧が自慢するように、自宅兼店舗になっている巨大なお屋敷におかれている商売用を兼ねた骨董品はすべてホンモノで、高価なものばかりらしい。本作では棠夫人のそんな腕力をしっかり見定めたい。

## ■不気味なタイトルに注目！その語り部は？■

本作ではまず『血観音』という何となく不気味なタイトルに注目！本作の宣伝ポスターには印象的な棠夫人・棠寧・棠真という三世代の女性の顔が描かれているが、それを見ただけで、これは観音サマの物語ではなく、まさに「血にまみれた観音」たちの物語だということがよくわかる。

観音（サマ）という言葉は元々女性になじみが深いものだが、それに血がつくとどうなるの？血は一方では戦争を連想させるが、他方では女性特有の血のイメージもあるから、血と観音（サマ）が結びつき、しかも同時代に生きる女三代が同じ問題に対処していく物語となれば、『血観音』というタイトルがいかにもピッタリ・・・？

さらに、そんな血なまぐさいストーリー（？）の進行役として、ヤン・ヤーチェ監督が台湾の人間国宝である楊秀卿を選んだのも興味深い。導入部で、2人の男女が静かに入ってくると、このじいさんとばあさんは一体ナニ？と思ったが、2人の姿は、日本ならさしずめ『平家物語』の悲しいストーリーを語る琵琶法師のようなもの。本作では、この2人の語り部（ナレーター）としての役割がストーリーの転機の度にその中でハッキリ見えるので、それにも注目！

## ■三姉妹 v s 三世代の女たち■

三姉妹とか四姉妹を描いた作品は多い。ロシア文学におけるチェーホフの『三人姉妹』やアメリカの『若草物語』、そして日本では『細雪』がそうだ。また、井上靖の『淀どの日記』も浅井長政と結婚した織田信長の妹・お市との間に生まれた茶々、おはつ、小督の三人姉妹の物語だった。そして、「三人姉妹モノ」では何と言っても長女・靄齡、次女・慶齡、三女・美齡を主人公にした『宋家の三姉妹』（97年）（『シネマルーム5』170頁参照）のスケールは群を抜いていた。

それに対して、「三世代の女たち」を主人公にした映画の代表は、アジアンビューティーの代表、チャン・ツイイーが茉（1930年）、莉（1950年）、花（1980年）を演じた『ジャスミンの花開く（茉莉花開く/Jasmine Women）』（04年）だった。同作の評論で私は、「1人3役による『百変化』の演技をじっくりと鑑賞するとともに、雨の中での出産シーンをはじめとする熱演と彼女の女優魂に拍手！」と書いた（『シネマルーム17』192頁参照）。

本作も「三世代の女たち」の生き方をテーマにした映画だが、『ジャスミンの花開く』とは違い、本作は母の棠夫人、娘の棠寧、孫娘の棠真の三世代の女たちが一つのお屋敷に同居しながら、棠家を襲う巨大なスキャンダルを前に如何に生きていくのかが問われる社会派クライム・サスペンスだ。しかも、『ジャスミンの花開く』は中国の上海を舞台に激動する1930年、1950年、1980年という異なる3つの時代をたくましく生きる女の

物語だったが、本作の舞台は台湾だから、日本の統治時代のおもかげを色濃く残している。しかも、中国本土は1949年以降中国共産党が支配する共産主義国家になったが、台湾は共産党との戦いに敗れた国民党の蒋介石が逃げ込んでからは、本省人と内省人との対立を含む複雑な支配と被支配の政治構造を余儀なくされてきた。そんな台湾で起きた政官財の癒着＝一大スキャンダルは、日本のそれともどこか共通点がありそうだから面白い。

そんな台湾での同時代を生きた三世代の女たちの社会派クライム・サスペンスをじっくり味わいたい。

## ■□■会場からは鋭い質問が次々と！監督の回答にも関心！■□■

私は『空手道』（17年）と本作の2本を、大阪アジア映画祭の会場であるABCホールで続けて鑑賞したが、その2本とも監督が挨拶のために来日していたから、鑑賞後は監督インタビューと会場からの質疑応答がされた。大きな会場だから遠慮がちな日本人の質問はなかなか出ないのでは？と思っていたが、何の何の、会場からは鋭い質問が次々と！

本作については、三世代の女たちを描いたポスターに関する質問が多かったが、すごかったのが中国語（広東語）のなまりまで理解している観客からの質問。台湾では日本語をしゃべる人は高い地位の人が多し、内省人に比べて外省人の方が地位が高いのが当然だが、それは言葉遣いでわかるらしい。なるほど、そこまで理解して本作を観ればより面白さが増すはずだ。

なお、私は第13回大阪アジア映画祭の関係者として3月15日の夕方7時から中之島公会堂で開催されたウエルカム・パーティーに出席し、『僕の帰る場所』の製作スタッフの一人として舞台にも登壇した。その舞台には合計約50本の映画の製作スタッフが次々と登壇したので、私は本作のヤン・ヤーチェ監督の顔はしっかりインプットしていたが、残念ながらウエルカム・パーティーの場で話すきっかけはつかめなかった。しかし、会場からのいくつかの質問に対するヤン・ヤーチェ監督の回答はすべて当之无愧。その答えを聞いていると、さすがにこれだけの作品を演出する監督の頭脳の冴えに感心。たまにはこんな形式での映画鑑賞もいいものだ。改めて大阪アジア映画祭の関係者として本作を鑑賞できたことに感謝。

2018（平成30）年3月26日記